

現地報告

ウィエンチャンの変容

村嶋英治[†]

Field Report, Changes in Vientiane

Eiji Murashima

2011年2月22日から25日まで、アジア太平洋研究科のGPプロジェクトの一環として、5国籍、3食文化（食事に制約がない東・東南アジア出身の学生の外に、ムスリム、仏教ベジタリアン）から成る9名のアジア太平洋研究科修士在学学生を率いて、丸8年ぶりにラオスの首都、ウィエンチャンを訪問した。筆者は、2000年初頭までの10年間はしばしば同地を訪問した経験があり、それを本誌に「ラオス社会の変貌と教育・仏教の現状—7回日のラオス訪問記」（『アジア太平洋討究』第5号、2003年、139-150頁）として報告したことがある。本稿では久しぶりに訪問したウィエンチャンの変容ぶりを報告したい。

一変したウィエンチャンの外観

過去8年の間にウィエンチャンの表通りは見違えるほどに変わっていた。道路は立派に舗装されただけでなく、中央分離帯まで設けられ、新車が間断なく走っている。道路脇の官庁や家々には、2011年3月に開催される第9回ラオス革命人民党の党大会（5年に一回開催）に向けて、国旗と党旗の二本の小旗が掲げられている。

かつてくすんだままに放置されていた凱旋門周辺の道路や広場には、手入れの行き届いた花壇も作られ、美しい都市公園と化していた。これはプラ・タート・ルアンの仏塔やシーサケート寺周辺でも同様であった。

ラオスは1997年7月にアセアンに加盟したが、その後ウィエンチャンで2004年11月に第10回アセアン首脳会議、2009年12月に第25回 Southeast Asian Games など大きな会議、競技会を開催した。その都度、会場、競技場、道路等のインフラ整備のために外国援助を引き出し、外国に引けを取らない首都の外観作りを励行してきたという。更に2012年11月には、従来以上に規模の大きな国際会議である第9回 ASEM(アジア欧州会合)首脳会議がウィエンチャンで開催予定である。

大統領府前のメコン河には、かつての自然堤防（ラーンサーンホテル正門のすぐ前を川沿いに走る通り）から300メートル以上も河原敷に入った所に、新たな大堤防が建設されていた。最近では中国がメコ

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

ン河の上流に多数のダムを建設したため、メコン河の水量が極端に減少して水路交通や水産、農業などに深刻な影響を与えていることがしばしば報道されている。メコン河の河原敷はかつてのような広大なサイズを必要としなくなったのであろう。

新堤防とその周辺は、恰も中国の都市の河川堤防と同様に、歩行者用の散歩路や公園として整備され、宵には散歩者やジョギング走者で賑わっていた。5年ほど前に筆者が訪れた、広東省潮州市を流れる韓江の堤防公園、漢口や重慶の揚子江の堤防公園の風景と見まがうばかりである。

タイ側を睨むアヌウォン王像の建設

新堤防の上の長い散歩路の真ん中辺りには、アヌウォン（以下、アヌ）王の巨大な銅像が昨年12月に竣工したばかりである。（本頁写真参照）銅像の台座には「ウィエンチャン・ランサーン・ラーオ王国の英雄アヌウォン王のモニュメント（西暦1767-1829年）」と刻まれている。タイ側の諸王や偉人たちの銅像と同様に、アヌ王像の下には長い鉄製ロウソク立てが設置され、多くの人々がロウソク・線香と花束を上げて礼拝している。

アヌは、シャム（タークシン王朝）軍とルアンパバーン軍の両軍に挟撃されて1779年に破れたウィエンチャンのシリブンサーン王のむすこの一人で、長らくバンコクで人質生活を送った。シリブンサーン王敗北後、シャムの属国となったウィエンチャンでは同王の王子たちが王位を継いだ。アヌは兄王二人の死亡後、1803年に王位を継承した。アヌは1819年にチャムパーサックでカー族の反乱が生じると、シャム（バンコク王朝）軍と協力して鎮圧した。シャムのラーマ二世王は、チャムパーサック地方の領主としてアヌのむすこ、ヨー王子を任じた。これによってアヌ王の勢力圏は拡大した。



1824年7月21日にシャムのラーマ二世王が死去し、アヌ王はバンコクの葬儀に出席した。同年3月5日にはシャムの西隣で大規模な第一次英緬戦争が勃発し、シャムの将来にも暗雲がたれ込めている時期であった。アヌは帰国に際して、新王のラーマ三世に18世紀末以来シャム軍がウィエンチャンからバンコク周辺に移住させ、強制労働を強いているラーオ人集団を伴って帰国する許可を求めた。アヌと即位前の三世王は親交があったと言われるが、三世王はこの要請を拒否した。これに加え、ウィエンチャンの勢力圏であった東北タイ地方にもバンコクからの徴税強化の徴候が現れてきたこともあって、アヌのバンコクに対する不満は高まった。

アヌはシャムに対抗するため、ベトナムや北タイの諸王国との連携を模索した。当時ベトナムはカンボジアへ勢力を拡大しつつあった。1826年暮れ(乾期)にウィエンチャンとチャンパーサクのアヌ父子両軍は、バンコクからイギリスに抗するために軍隊を派遣せよという命令が届いたと偽って東北タイの諸土侯を欺き、彼らの協力を得ながらバンコクに向けて進軍した。アヌ軍は1827年2月17日に東北タイの表玄関コーラートを占領した。しかし、同地に留まったままアヌ王はバンコクに進軍することなく、同年4月末にはウィエンチャンへ撤退を開始した。その理由として、ベトナムや北タイ諸王国が期待した通りには軍を興さなかったこと、イギリスとシャムとの間に予期した戦争は生じなかったこと、多数のコーラート住民をウィエンチャンに強制移住させようとしたところ抵抗されて兵力を少なからず監視に割かざるを得なくなったことなどが指摘されている。アヌ軍を追撃したシャム軍は、1827年11月29日にウィエンチャン都を占領し、部分的に破壊して撤退した。

ベトナムに逃げたアヌ王一族は、ベトナムがシャムに向けた使節を伴って翌28年8月2日にウィエンチャンに戻って来た。シャム軍は同年10月20日に同都を再占領し、地方に身を隠していたアヌらを見つけ出しバンコクに送致した。アヌはバンコクに到着後、間もなく62年の生涯を終えた。ウィエンチャンは、シャム軍に徹底的に破壊された¹。残った建物は、シャム軍の司令部が置かれたシーサケート寺のみであるという。

アヌ王の死後181年を経てウィエンチャンに建設された同王の巨大像は、恰もタイを睨み付けているかの如くに、メコン河越しにタイ側に顔を向けて仁王立ちしている。アヌ像がタイ側に顔を向けていることは、タイでもニュースとなった。

ラオス革命人民党は、マルクス主義に立脚した政党であり、同党は1975年の権力奪取直後に王制も廃止した。当然、封建君主などを肯定的に評価するようなことはなかった。しかし、今になってしかも大統領府の目の前に、何故アヌ王の巨大像を設置したのであろうか。礼拝用のロウソク・線香と花束、あるいはベッサラート親王などの写真を、銅像の前の路上に並べて売っている中年女性に、どうしてアヌ王像はタイ側を向いているのだと問うと、「それぞれの国にそれぞれの愛国心がある」という答えが返ってきた。ここを訪れるタイ人たちから、彼女は繰り返し同じ質問を受けているようであった。

2010年には一人当たりGDPが1000ドルを超えた経済発展と資本主義化が進むなかで、ラオス革命人民党の一党支配体制の正統化には、旧来のマルクス主義イデオロギーや半世紀前に反仏・反米解放闘争

¹ Anat Anantaphak 『バンコク王朝初期の大戦争』, YPSY, Bangkok, 2011, pp. 168-200 (タイ語)

を指導したという輝かしい歴史的役割だけでは不十分だと考えられるようになったのかもしれない。

しかし、これは、反仏反米闘争勝利の輝かしい歴史の宣伝が疎かにされているということではない。逆に従来以上に力が注がれているのではないかという印象を受けた。ウィエンチャン市内に、巨大な「ラオス人民陸軍歴史博物館」がオープンしており、徒広い一階の室内・室外全体にソ連や中国などから援助された戦車、ヘリコプター、大砲などの武器弾薬が展示され、2階には写真と説明文を中心とした、ラオス革命人民党の歴史、反仏反米闘争の歴史の展示があった。巨大な建造物、写真を中心とした展示物という方法は中国の博物館でもしばしば目にするものである。陸軍歴史博物館の近現代史の展示は、ラオス国立博物館と同一のものであった。両博物館ともに、教員に引率された中高校生の集団が見学していた。他にも、巨大なカイソーン記念博物館が完成していたが、訪問した時は生憎修理中とかで見学はできなかった。

後述するラーオ・スターテレビ放送は、筆者の在ウィエンチャン中、毎朝、反米闘争時代の戦闘フィルムやホーチミンらの画像を放映していた。同時に、米軍が投下した不発弾(UXO)が現在でもしばしば爆発し、農作業中の農民が毎年3百余人犠牲になっていることも報道していた。

ラオスの2011年-15年の第7次5ヶ年計画の9大目標は、①貧困削減、②全ての人に教育、③ジェンダー間の不平等是正、④幼児死亡率減少、⑤産婦死亡率減少、⑥マラリア死亡減少、⑦環境保全、⑧グローバル・パートナーシップの発展、⑨不発弾(UXO)問題である。これからも不発弾問題の解決が重視されていることが判る。

同放送局のニュースでは、コラプシオン(ソーラート・バンルアン)撲滅という言葉を何度も耳にした。これは、党大会に向けての綱紀引締めなのであろうか。

変わらない公立学校、タイとの比較

ウィエンチャンの大通りの外観は一変したが、大通りから一步内側の住民居住区に入ると、路上を覆う赤土の粉塵や埃が舞上がる無舗装路が続く、昔と大差はない。2月23日(水曜日)に、市内のシウィライ(Siwilai)公立小中学校を訪ねたが、施設は極めて貧弱。ラオスの公教育は8年前から殆ど変化していないという印象を受けた。同校は同一敷地の中に5年制小学校(Prathom Sombun Siwilai)と4年制初等中学(Mathayom Ton)の校舎が建ち、それぞれに別々の校長が置かれている。小学校は、1年から3年までが各1クラス、4、5年は各2クラス、加えて1クラスの幼稚園(園児数11名)の合計8クラスから成り、合計児童は187人(含む園児。男104、女83)、教師は9名(男1、女8)である。

11時半の昼食休みに入る直前の教室を見て回った。どの教室にも教師がおり、教室当りの児童数は30人以下であった。子供たちは全員清潔な制服を身につけている。これだけ見ると充実した教育が行われているように見えるが、教室は狭く、窓も小さく風通しも照明も悪い。教室の壁には、クラス生を5班に分けた組織図が掲示されている程度で小学校らしい装飾や絵画は殆ど何もなく、殺風景な壁がむき出しのままである。タイ側の公立学校にある冷房設備の教室や授業用のパソコンは全くない。因みにラオスの一大産業は水力を利用した電力産業であり、近隣諸国に輸出しているが、国内の電気料金はタイ

国並に高いという。

図書室にはドイツの NGO から寄贈されたラーオ語の図書が並べられていた。小学校は 2 学期制で、3 年生からは週 2 時間の英語科目がある。教科書は無償、制服・文房具は自前、給食はなく昼休みに自宅に戻って食べる。授業料はないが年間一人当たり 4 万キープ（現在 260 キープ前後が 1 パーツに相当）を徴収し学校の光熱費等に充てている。

他方、中学は 4 学年ともに各 2 クラス、生徒数 366 人（男 172、女 194）、教師数 20 人（男 5、女 15）である。中学の各教室には元素一覧表、数学の方程式、魚の解剖図などが貼られていた。一教室では女性教師が、2 歳くらいの自分のこどもを保育しながら授業をしていた。女教師が子守しながら授業する光景は 8 年前と同じである。

小学生も中学生も文部省の定めにより、授業は朝 8 時開始、11 時半から 2 時間昼休みがあり 16 時終業の 6 時間授業、土日は休日である。

校長先生の話では、かつて同校はラック・ホックという地域にあり党のトップ幹部（ソムサワート、カイソーン、ヌーハックら）の子弟も通っていた。1997 年に日本の援助で新校舎を建設する際に現在の地に移ってきた。（校舎の壁には、日本とラオスの両国旗を配し日本の政府と人民の援助により 1997 年 4 月 4 日に竣工したと書かれたプレートが貼られている。）現在のラオスの中学は 7 年制であるが、同校には 4 年までしかない。中学 5-7 年の高等中学（高校）クラスを開くことができない理由は、物理的な事情、即ち校舎がないためである。この地域の生徒が遠くの高校に通う必要がないように、高校校舎の建設をしたいのだが、建設資金がないという。（我々はゼミの修了生であるラオス政府計画投資省の課長を通じて、ラオス文部省に視察先の選択を依頼した。我々がこの学校に案内されたのは、日本の援助が暗に期待されているのかもしれない。）

同校に通う児童生徒は、学校から 2 キロ範囲内に住んでおり、この地域は軍人や公務員の住宅が多いので、主にその子女たちである。11 時半の昼休みに入ると、児童生徒が一斉に徒歩、自転車、オートバイで自宅に昼食のために帰った。

これは前日の 2 月 22 日に訪問した東北タイのウドン市内の第五市立学校とは大違いである。ウドンの同校長や副校長は次のように語った。ウドン市内の良家（上中流）の子女で成績優秀な者は、県の模範学校などに通学するので、市立学校に学ぶ者は、家庭も成績も二、三流の者たちである。同校卒業生で大学レベルまで進学する者は 1 割程度である。同校生徒のうち市域内に住居がある者は 2 割に過ぎず、市外からの通学者が 8 割を占めている。[タイには学区制がなく、入学する小・中学校の選択は全く自由なので²]、30 キロも離れた農村部から乗合ピックアップで通学している生徒も少なくない。この学校の生徒の 5~6 割は、両親と同居せず、祖父母などに養育されている。彼らの両親の殆どは、若くして定収入もないうちに結婚し、子供ができると祖父母などに子供を預けて出稼ぎに出た末に、離婚に

² 農村に住む児童生徒の保護者は、住所のある村落の学校に入学させるよりも、距離が遠くても都市あるいは都市近郊の学校に入学させることを好む傾向が強い。後者の方が、設備が整い、教育の質も高いと考えられているからである。そのため、タイの地方では朝夕、児童生徒を満載した通学用のピックアップを目にすることが多く、これが日常の風景となっている。一方、農村部では、児童生徒数が 50 人に満たない小規模校が増加している。政府は、小規模学校を統合することを計画しているが、該当地域の住民の反対が強いという。

至ったものである。生徒の5～6割がこのような崩壊家庭 (Khropkhrua taekyaek) のこどもである事実は、第五市立学校だけではなく、同市にある10校の市立学校全てに当てはまることである。崩壊家庭が多いことは、生徒の麻薬中毒などの深刻な社会問題の原因となっている、と。

第五市立学校は2年制幼稚園(4-5歳児)、6年制小学校、3年制初等中学の合計11学年から成り、児童生徒総数は1357人、38クラス、教師数は50人である。整備された図書室や3室のパソコン教室(1室毎に25台)がある。幼稚園児用の教室は、3階建て校舎の1階部分の5教室で、全室に冷房が入り、大型テレビ、清潔なトイレが備わり、日本の幼稚園と同様な色とりどりの装飾が施されている。

午後3時ごろの幼稚園室を見学した。幼稚園クラスは2時半から父母が引取りに来ることになっているが、まだ半数以上の園児が残っており、ある教室ではテレビアニメを視、別の教室では先生の紙芝居をみていた。日本の保育園や幼稚園に比しても遜色ないという印象を受けた。さらに、幼稚園児用にパソコンを用いて英才教育をする目的でHong Ajariya(英才教室)というパソコンルームも設けられていた。エアコンや英才教室はウドン市が独自予算で行っているという。

スラチャート校長にタイ政府の15年間の無料教育政策の実態について質問すると、体育教師出身で歯に衣を着せない校長は、次のように話した。教科書代として一人当たり年間400バーツの政府補助があるが、この額では8科目中3から4科目の教科書を買うことができるに過ぎない。残りは保護者の自己負担となる。制服代としては、一人当たり一年に195バーツの補助があるが、この額ではシャツだけしか購入できずズボンやスカートは自己負担となる。文具は一人当たり年間200バーツの補助がある。政府補助金で、教科書、制服、文具を学校当局がまとめて購入して児童生徒に配布するかつてのやり方は、教員がリベートを取っているという批判が生じたので、[現在は文部省の命令により全ての学校は、政府の補助金を現金でそのまま保護者に渡さねばならず]、保護者が必要なものを自らの責任で揃えることになっている。

給食については児童生徒総数の8割に対して、一食12バーツの政府補助金があるが、残り2割には及ばない。その結果、同校では園児から小学6年生までを対象に12バーツの補助金で作った学校給食を無料で提供し、中学生たちは自分で金を払って校内の給食場で昼食を取っている。校長は、民主党アピシット現政権が15年間(幼稚園3年、小学6年、中学6年)の無料教育という政策を掲げて宣伝しているにも拘わらず、実情は無料にはなっておらず依然として保護者の負担が多いことを批判する口吻であった。

ウドン市立第五学校は、地方都市の普通の学校であるが、児童生徒に対する政府の補助は相当に行届き、設備水準も高く、日本の同様の学校に比しても遜色がないように思われた。タイでは国家予算の4分の1近くを教育に注いでいることの現れであろう。

タイの地方都市のウドンの市立学校と一国の首都ウィエンチャンのシウィライ公立小中学校とは、間にメコン河という国境線はあるが、70キロほどしか離れていない。しかし、学校設備や政府の教育補助の面では正に雲泥の違いである。しかし、首都でも自宅近くの学校に通学し昼食を自宅に食べるという長閑なラオスは、タイ側に比して未だ社会が安定していることが窺われる。

テレビコマーシャルの出現、ラーオ語出版の活発化

ウィエンチャンの変化は、ただメイン・ストリートの外観だけに過ぎないと見ることはできない。ラオスが確実に変化していることは間違いない。

例えば、テレビ放送である。ラオスのテレビ番組は、官製ニュースばかりで面白みがないので、ラオス国民はタイ側のテレビ放送を好んで視ている、ラーオ人が、標準タイ語をよく聞き取ることができるのは、毎日タイのテレビを見ている御陰だ、と言われてきた。

宿泊したラーオ・プラザ・ホテルで唯一視ることができた、ラーオ語のテレビ・チャンネルはラーオ・スター放送であった。同局は民間放送だという。同放送で、先ず気が付いたことは、朝6時半から7時までの30分間は、モン(Hmong)語、続いてクム(Khmou)語のニュースが、民族衣装を着た男女アナウンサーによって放送されていることである。モン語、クム語ニュースは、毎日変わるのではなく、二日間同一のものであったが、ラーオ族に次いで人口が大きいモン族、クム族の言語でもニュースを放送していることは、少数民族に対する配慮であろうか。

これ以上に驚いたことは、タイのテレビと同様な商品のコマーシャルが盛んに行われていることである。例えば、ライオンのシャンプー「植物物語」(この語はタイのテレビCMと同様に日本語のまま用いられている)とか、トヨタの自動車とか、中国製のオートバイなど。ウィエンチャンの町で最も目に付く車は韓国のヒュンダイ車であるから、同車のCMも大々的に行われているはずであるが、私が見た朝の時間帯には目に出来なかった。私の記憶では、8年前までのラオスのテレビ放送は官製ニュースだけでCMはなかったのだが。

テレビ番組の一つは、司会者がアメリカ、オーストラリア、タイなど外国に住む一般ラーオ人からの電話を受けて、その会話内容をそのまま流すものであった。日常生活についてのとりとめない会話ではあるが、出稼ぎやかつて難民として国外に出たラーオ人と国内のラーオ人との間には疎隔は少ないようである。ラオスでは海外報道の規制やウェブ・サイト規制は行われていないそうである。

ウィエンチャン市内の中心市場であるタラート・サオの本屋で目にしたラーオ語新刊書の多さも驚きであった。しかもハードカバーのものが多。例えば、国家社会科学院編『ラオス革命人民党史(簡略版)』(国家印刷所, 2010年6月25日刊, 368頁), 外交院編『ラオス外交関係史』(Thawisai kanphim, 2009年, 279頁), 『シェンクワン省の武装部隊と人民の闘争(1945-2005年)』(陸軍印刷所, 2010年, 484頁), トーンサワート・プラサート『フランス支配以前のラオス(ラーンサーン)』(国家書籍印刷販売部, 2009年12月15日発刊, 250頁), マハーシラーウィーラウォン著『アヌウォン王の伝記』(Dokket出版社, 2010年, 56頁), 『宝石中隊の英雄, 1962-1974』(国家印刷所, 2010年11月20日発刊, 139頁)等々。どれも政府関係の出版物であり、政権の正統性強化やナショナリズムの高揚を目的としているのであろうが、かつては『カイソーン全集』などを除き、販売されているラーオ語官製出版物も極めて少なかったことに比せば雲泥の違いである。

中国、韓国、タイなどからの進出企業数と比せば少ないが、日系企業60余社がラオスに進出している。日系企業は、スーツ、フトン、シューズなどの縫製・製造、ユーカリを植林しての製紙用チップ生産などを行い、タイのレームチャバン港から日本に輸出している。4年後に鉄道が完成すれば、ラオス

で製造した商品の中国、ベトナム、ミャンマーへの輸出も容易になるという。また、証券市場も動き始めたという。

ラオス政府は従来野放しにしていた米ドルやタイバーツの国内流通を規制する方針を採っている。かつては市内のどこでもドルでもバーツでも何も言わずに受け取られていたが、今回はホテルの支払いでも市内での購買でも、まずラオスの通貨キープで請求された。キープの手持ちがない場合はドル、バーツで支払うことができたが、不利な交換レートであった。

ノンカーイ・ウィエンチャン間の友好橋のラオス側入管前には、ラオス銀行の次の布告（どういう訳かラーオ語のみ）が貼られ、違反者に対する罰則が明記されていた。

- 1、ラオス国内ではキープで商品およびサービスの値段を表示すること。
- 2、ラオス国内では商品およびサービス代金の授受はキープで行うこと。
- 3、キープもしくは外貨の交換は、ラオス銀行が認可している銀行もしくは交換所で行うこと。
- 4、紙幣損壊の禁止。

これもラオス経済が拡大し安定してきたことの証左であろう。